

新聞記者の思い出（6・7・16）

——京大俳句事件・その他——

勝村 泰三（昭4・文甲）

勝村でございます。今、井垣さんからご紹介いただきましたように、はじめは今年の五月の桜章会、桜章会というのは、昭和四、五、六、七年の三高文科理科卒業生の関西在住者の懇談会ですが、そこでお話する予定が、私がひどいヘルペスにかかって入院しましたために流れてしまいました。ところが井垣さんから電話で、七月の例会でその話をせよとすすめられました、祇園祭のころの京都がこんな暑いということを、すっかり忘れてお引き受けしたわけでございます。どうぞ皆さん、くつろいで、気楽におきき下さい。

最初に誤解を解いておいて頂きたいのですが、新聞記者だったからというて、そんなに面白い話ができる訳はありません。私は昭和八年に京大の法学部を出まして、すぐに朝日新聞に入りました。そして昭和三十九年に定年になって傍系の会社に移りますまで、確かに三十年以上も新聞社におりましたけれども、辞めましてから、もう三十年になります。毎日、毎日、事件なり、社

会、経済情勢なりを追いかけて、記事や解説を書いたり、テレビで話をしたりしておりましたが、これは追いかけて、というよりも、事件に追いかけてと申す方が正しかったと思います。いわば、新聞記者というものは、全くの「その日暮らし」の商売、仕事でした。しかも、刻々入ってくる情報の変化の中心にいて、朝日新聞という大きな組織の、情報の中心にいてこそ仕事がありましたので、今はもう現役を離れて何十年ですから、面白い、活きいきとした話ができるはずがありません。どうぞ、ただ老人の思い出話として聴いていただきたいとおもいます。それも、あるいは記憶違いもあろうかと思えますので、予めお許し頂きたいと思えます。

昭和八年の四月に朝日に入りまして、新入社員の研修中に、京大法学部に滝川事件が起こりました。研修といいますが、既に昭和六年に満州事変がはじまっておりましたので、一通り朝日の歴史や新聞の使命などの講義を受けたのちは、実習訓練です。朝早くから城東練兵場でオートバイの訓練、午後は四時ごろまで写真撮影と現像、焼き付けの実習をみっちり仕込まれ、後は深夜まで社会部の先輩の警察回りについて回るといふ猛訓練の毎日でした。それが五月二十日、木村社会部長に呼ばれて、「君、先生の顔ぐらい知つとるやろう、」とすぐ京都支局に手伝いに参りました。

皆さんご承知と思いますが、滝川幸辰教授がその二年前に、NHKで放送した刑法の話を「刑法読本」として出版したのを、急に右翼が共産主義思想だと言いがかりをつけ、貴族院でも問題

になり、とうとう発売禁止になりました。滝川先生のは、いわゆる客観主義刑法で、姦通罪で女だけを罰するのは不合理だとか、確信犯は教育刑では改心させられないとか、今からおもえば当り前の学説ですが、これに難癖をつけたのです。それで鳩山一郎文部大臣が、小西重直総長に滝川教授を辞任させよ、と強引に言つて来しました。法学部の教授会は、これは、長年にわたつて確立した「大学の学部の自治と学問研究の自由の侵害」だと猛烈に反発抵抗しましたので、鳩山文相はついに五月二十六日、文官分限令によつて、滝川教授を罷免してしまつたのです。法経第一教室で開かれていた法学部の学生大会にすぐに全教授が出席し、宮本英雄法学部長が「いまは総辞職もやむなし」との条理をつくした長文の声明を読み上げ、佐々木惣一、恒藤恭、末川博、滝川幸辰らの十六人の全教授が、学生に会釈して次ぎつぎに講壇から消えて行きます。拍手で送る学生の目からは涙があふれています。全助教授も講師全員も同時に辞表を出しましたが、三月までここで学んでいました私は、同じように感激に浸つておりますと、「勝村君、すぐにこの記事を書け」といわれました。とにかく、一所懸命に鉛筆を走らせると、早版から載せるのやからとザラ紙に大きな字で書いた原稿を一枚一枚引つpegがすように取り上げた先輩が、眼を通しながら、電話口で大阪本社へ吹きこんでいきました。無我夢中で何を書いたやら、ただもう汗びっしりです。

翌朝、支局の宿直室で、顔も洗わず、届いたばかりの朝刊を開いて、紙面のトップに、「吹き

募る京大暴風帯」という特大活字の見出しで、学生大会の写真とともに、おおきく載った自分の記事をながめていますと、早くも出社してきた大学担当の田畑磐門という大先輩が、「勝村君、誤解するなよ。君の記事がうまく書けたから大きく載ったのじゃないぜ。日本から自由が奪われて、ファッショ化して行く瀬戸際の大事件だから大きく扱われているんだ。今ここで、大学が負けたら、きつと言論の自由もとられてしまう。いっしょに頑張ろう。」といわれました。この一言は、今でもはつきりと私の耳に残っております。

事件はたちまち東大をはじめ全国の大学に波及しましたが、やがて文部当局の切り崩しによって京大の敗北に終わり、日本は一気にファッショ化していきました。しかし、日本にとっては大きなマイナスになったこの事件に、入社一か月ぐらいの、全くの駆け出しの新米記者が、一番はじめの仕事として、この滝川事件の報道に当たらせてもらったのは、私にとって大変幸せなスタートであったと、思っております。

この時から昭和十五年の末に本社の經濟部に移りますまで、およそ八年の間ずっと大学の記者クラブに席をおいたままで、警察回りもやり、美術、宗教や宮廷関係など、いろいろな分野を担当しましたが、この時の蓄積がその後ずいぶん役にたちました。新聞記者は、自分で何もかも知っていないなくても、事態を正確に把握して、どんなことは誰に聞いたらよいかということを、常に頭に蓄えておくのが必要ですが、この時代に京大の各学部の教授をはじめ、当時は東方文化研究

所といった今の人文科学研究所、それに同志社、立命館など各大学の先生方はもちろん、各宗本山の宗教家、お茶やお花の家元達まで、広く知り合いになったことも大変プラスになりました。それもこちらが知っているだけでは駄目で、むこうにも覚えてもらうことが必要です。いや、それ以上に信用される必要があります。約束は必ず守る。書くなどいわれたことは許しがあるまで記事にしない。書くときには必ず了解を得る。報道はもちろん迅速を要しますが、それ以上に正確、公正でなければならず、不法と暴力を排して腐敗と戦う気概も必要です。信用ということは、銀行だけに限らず、新聞にとっても欠くことはできません。朝日新聞が、世界的に名声を維持しておりますのも、明治の始めの創業以来、多くの先輩たちの努力と信用の積み重ねがあったからこそ思っています。

京都の学界では、それから数年のうちに、文学部天野貞祐教授の「道理の感覚」の自発的絶版事件、同志社大学の新築の道場に右翼学生が勝手に神棚をつけてしまった神棚事件、いわゆる下鴨グループの和田洋一、能勢克男、中井正一、新村猛らの若い学者たちが反ファッショとして一斉に検挙された昭和十二年の「世界文化」事件や「学生評論」の弾圧。その間に昭和十年の大本教弾圧事件などが、次ぎつぎに起こりましたが、天野教授の著書絶版や、同志社の神棚事件の背後には、当時各大学にいた配属将校が、確かに動いていたと信じております。

そして、とうとう昭和十三年五月の近衛内閣では、荒木貞夫陸軍大将が文部大臣になりました。

私たちは「とうとう、ここまで来たか」とため息をつきましたが、間もなく京大を視察にくる日程がきまりますと、毎日新聞、日の出、京都日々などの記者とひそかに相談をしまして、なんぞ荒木をびっくりさそうということになり、電気工学かどこかの教授に、内緒の話だがと頼み込んで、構内にある大きな放電の設備の下に案内してもらい、頭の上で、不意にバチンと放電してもらうことにしました。万事秘密裡にことを運び、いよいよ当日バチンとやりましたが、ヒゲの大将はビクともしません。何しろ大砲で鍛えた相手です。驚いたのは案内の先生方でした。ずっとあとで、この案内の先生に話を打ち明けましたら、そんなことだったのか、僕にもその極秘計画を知らせてくれたら、もっと面白いことを一緒に考えたのに、と大笑いしました。

もちろん新聞記者は大変忙しい仕事でしたが、時には息抜きもいたしまして、当時この三高会館の二階は菊水というカフェでしたので、そこで一杯やって、流行歌も覚えました。昭和十五年ごろ、淡谷のり子の「夜のプラットホーム」という歌が流行しましたが、たちまちレコードが発売禁止になりました。この歌は戦後NHKのど自慢で有名になりましたけれど、その歌詞に「君、いつ帰る………」という箇所があり、それが出征兵士の士気を阻喪させるからいかにという理由でした。

さて、ここまでだいぶん長くなりましたが、このへんで、「京大俳句事件」の話に移りたいと

思います。今日お集まりの皆さんの中には、きつと俳句をお作りになる方もたくさんおられて、この事件をよくご存じの方もおられるでしょうが、この事件は、当時から世間にはあんまり知られておりませんし、あの岩波の大きな近代日本総合年表にもちよつと見当たりません。もし、私の記憶に違いがありましたら、後で教えて頂きたいと思います。

三高の先輩で、有名な俳人といえは、日野草城と山口誓子の二人をまず思います。日野草城（克修・よしのぶ）は大正十年一部乙の卒業、山口誓子（新比古・ちかひこ）は大正十一年の文科乙類の卒業で、ともにずっと若いときからホトトギスで認められ、すぐに「巻頭」に載ったり、投句の選者になったりしましたが、後には二人とも、その新しすぎた傾向のために、虚子に退けられることになりました。草城は京大を経て大阪海上という会社に入り、誓子は東大を出て、住友合資会社に就職しましたが、それは後の話。三高時代の二人は、仲間とともに神陵俳句会、続いて京大三高俳句会を結成し、これを母体として、大正九年に、七高から京大国文科に学んだ鈴鹿野風呂（登）らとともに俳誌「京鹿子」を創刊しました。草城は、この創刊のときから編集や経営を担当しましたが、後には、野風呂がずっとあとまで責任者になっています。この野風呂は、岡崎の武専、武術専門学校の教授から校長になった人です。

私は、俳句は全く作りませんが、新聞記者になってから、先輩に教えられて、実は俳諧歳時記を愛用しました。新聞記事は、最初の書き出しの工夫がなかなか難しいのですが、季節的な用語

のヒントが歳時記から得られることがよくありました。もちろん、いつもうまく行くとは限りませんが、そんなことで俳句雑誌にも興味をもつようになった訳です。

「京大俳句」という同人誌は、ちょうど昭和八年一月に「京鹿子」とは別に、やはり京大三高俳句会を母体として、平畑静塔、後藤左右、井上白文地らが創刊メンバーとなって発刊されました。平畑静塔（富次郎）は大正十五年に三高の理乙を出て京大医学部に進んだ精神科のお医者さんですが、「京大俳句」は始めから、新興俳句をめざしました。新興俳句というのは、日野草城や山口誓子にも既に多少その傾向は見られましたが、静塔らは、正岡子規の「柿食へば 鐘が鳴るなり 法隆寺」や、高浜虚子の「遠山に 日の当りたる 枯野かな」というような、花鳥諷詠や写生を乗り越えて、実生活に即した俳句の新しい世界を開こうとしたものですが、「京大俳句」はさらに一歩進んで、「無季」つまり季語を無視し、自由主義的な発想の俳句を唱えたのです。

時局が満州事変から日支事変、日中戦争と拡大、進展するにつれて、彼らは無季俳句から、無季戦争俳句、さらに反戦、厭戦俳句へと、一気に突き進んで行きました。

その上、静塔らは思い切って「京大俳句」から、京大三高の枠をすっかり外しまして、広く日本中の新興俳句の人々に開放することとし、まず西東三鬼を「京大俳句」の同人に誘いました。西東三鬼（斎藤敬直）は東京歯科医専を出た歯科のお医者さんで、始めは「走馬灯」「馬酔木」などに関係していましたが、新興俳句、都会俳句を唱え出しまして、

水枕ガバリと寒い海がある

工場を担荷は糞のように出る

煙草捨て唾吐き暑き射手となる

道寒し兵隊送るほとんど老婆

などを発表していました。この最初の「水枕——」の句は大変有名で、三鬼の名を高くしたものです。彼は既に東京における新興俳句の多くの同人誌の横の連絡をはかって、「新俳話会」を組織していましたので、高屋窓秋、石橋辰之助、杉村聖林子などを「京大俳句」に加盟させました。

平畑静塔は、もちろん広く関西一円の仲間を次ぎつぎに誘いましたが、昭和十二年の秋、京都での「京大俳句」創刊五周年記念大会の講演で、三鬼は「戦争の本質を見極めて、戦争俳句を作ろう。それは必ずしも戦場にいらなくてもよい。私たちの肉体に浸み込んでいる「戦争」を、おのれの声として発すればよい。それが戦争リアリズムだ、」と主張しました。

それから後、「京大俳句」には次のような句がならんでいます。

我講義軍靴の音にたたかれたり

井上白文地

千人針を前にゆえしらぬいきどほり

中村 三山

軍需工の列を凝然と見て過ごす

平畑 静塔

墓碑生れ戦場つかの間に移る

石橋辰之助

一兵士はしり戦場生れたり

杉村聖林子

憲兵の前ですべてころんじやった

渡辺 白泉

戦争身近に拳闘を叱咤する

三谷 昭

熱い味噌汁をすすりあなたぬない

波止 影夫

リトヴィノフは葡萄酒じゃないぞ諸君

仁智 栄坊

砲音に鳥獸魚介冷え曇る

西東 三鬼

また別に平畑静塔は

軍歌行進露帝（ツァール）の如き痴呆らよ

痴呆らの軍歌音符に我が足拍つ

などを発表していますが、彼が精神病院の医師であることを知らなければ、これらの句は確実に軍部を侮辱していると考えられたに違いありません。

当然のことながら、これらの新興俳句全体に対して、いわゆる正統派の水原秋桜子、中村草田男、石田波郷、加藤楸邨などの俳人たちは、すべての新興俳句は邪道だと、徹底的にきびしく批判攻撃したのですが、彼らにはいっこうに、こたえなかったのです。

そして、とうとう昭和十五年二月十五日の朝早く、京都府警察部の特高が一斉検挙にのりだし、

平畑静塔、井上白文地、中村三山、波止影夫、宮崎戒人、仁智栄坊らが、京都市内の各警察署に分散留置されました。

もちろん記事は差し止めでしたから新聞には一行も載りません。しかし、やがてこれを知った西東三鬼は、すぐ東京の新俳話会の仲間に警戒を呼びかけました。

とにかく、既に米や繊維製品をはじめ、煙草、味噌などまで配給、切符制になり、パーマネントは退けられ、国民服やモンペを着せられたご時勢です。しかし、これらの人達は、いくら何でも、俳句を作って罪になる筈がないと、思い込んでいたようです。戦争リアリズムを唱えながら、時局認識が不足していました。あんまりノンキ過ぎたようです。

実は、この一斉検挙の三か月前の昭和十四年十一月号の「京大俳句」には、中村三山が

特高が擾す幸福な母子の朝

という句を「退屈な訪問者」と題して発表しています。しかし彼は特高を俳句の題材にしているだけで、本気で身の危険を予見していた様子は全く感じられません。また平畑静塔もずっと以前の昭和十一年十月の「京大俳句」の編集後記に、「近来、俳句の危険思想に当局が眼をつけているらしい」とも書いていましたが、まさか検挙されるとはと、真剣に警戒していたとも思えません。

そして今度は、昭和十五年五月三日の朝、東京の石橋辰之助、杉村聖林子、三谷昭、渡辺白泉

らが京都の特高に検挙され、同時に大阪の和田辺水楼、淡路で堀内薫が捕まえられました。

しかし、どうしたことか、西東三鬼だけはこの検挙から漏れていたのです。三鬼自身は、確かに多くの新興俳句の俳人を京大俳句に誘った覚えがあります。その彼だけが、何故か捕まえられないので、俳人たちの間には、どうも怪しいという噂が流れ、それから三、四か月のあいだ、三鬼はいても立ってもおられぬ思いで神経を擦り減らしました。今から思えば、特高はかれをオルグとみて、「泳がせておいた」のかも知れません。

ついに八月三十一日には、とうとう彼も検挙されたのですが、その二日前の二十九日に、主義主張は異りながらも三鬼のことを心配した石田波郷が、山本健吉夫妻らといっしょに三鬼を誘って、葉山の海岸に泳ぎに連れていきました。波郷はその晩、三鬼の家に泊まり翌朝、少し金を作ってくると東京に出たまま、その晩は帰りませんでした。もし波郷がもう一晚とまっていたら、彼もどうなったか分かりません。

特高は、彼らには思いもよらず、治安維持法を適用しました。一九二七年（昭和二年）七月十五日、モスクワのコミンテルン常任執行委員会は、「日本に関するテーゼ」、いわゆる二十七年テーゼで、「日本における共産主義文芸運動の基礎はプロレタリア・リアリズムによるべし」と規定、指令していました。新興俳句の連中、殊に京大俳句の仲間たちが「リアリズム」とか、「戦争リアリズム」とか、何も知らぬふりをして主張しているが、実はこのコミンテルンの指令に密

かに、忠実に従っていたのに違いない、というのが、京都の特高の立場だったのです。

特に、仁智栄坊は、大阪外語のロシヤ語を出て大阪逓信局に勤めていて、神戸の自宅に短波の受信機をそなえ、毎晩モスクワの短波放送を聴いており、これを翌朝、逓信局の上役を通じて東京の本省に提出していたのですが、これは上役の命令と偽装して、モスクワの指令に従っていたのに違いない、という訳です。そして彼は、とうとうその通りの手記を書かされてしまいました。平畑静塔は、彼らの中で一番の理論家でした。すでに早く「子規、虚子批判論」を発表したりしていましたが、いち早く情勢を見抜いて覚悟を決めました。そして、実は、自分一人だけが、戦争リアリズムの本当の意味を知っていて、みんなを操っていたのだ。だから何も知らぬ他の連中を早く釈放してほしい。こういう手記を書いておきます。

西東三鬼は、この平畑静塔の手記を見せられたとき、彼の友情に泣きました。しかし、三鬼の句には、

昇降機しづかに雷の夜を昇る

というのがあり、この「雷の夜」は国情の不安な時世という意味で、「昇降機が昇る」というのは、共産主義が静かに高揚するという意味に違いない、と責めたてられました。とうとう確かにそれに相違ありませんという手記を書いたそうですが、今から思うと、全くのひどいコジツケとわかりますけれど、これが当時の日本の姿でした。

結局、平畑静塔と仁智栄坊ともう一人、波止影夫の三人だけが起訴されました。この波止影夫は、昭和八年の滝川事件のときに学生運動の中枢にいたとの前歴から三人の中に入れられたのです。そして他の者は全部、起訴猶予となり、二年間の保護監察処分となって、その年の十一月の末に釈放されました。保護監察というのは、ずっと保護監察司に監視され、遠くに行くときはいちいち警察に届けなければならぬ不自由な身分です。

実は、この昭和十五年は紀元二千六百年にあたり、十一月のはじめの宮城前での祝賀行事につづいて、天皇、皇后両陛下の京都行幸がありましたので、それが終わるのを待って釈放されたのだと思います。

平畑静塔は、昭和十七年に刑期を終えて釈放されましたが、すぐ陸軍に召集され、中国の前線へ送られました。

京都の特高は越えて十六年二月に、警視庁と協力して、新興俳句の「土上」「広場」「生活派」「俳句生活」などの同人、計十三人を検挙しましたが、これは京大俳句とは、直接関係がありませんから、省略いたします。

さて、話は大きく飛びます。

戦後の昭和二十八年に、私は大阪の学芸部長になりました。そして朝日俳壇と朝日歌壇も受け

持ちになりましたが、朝日俳壇の選者は、ずっと前から高浜虚子ひとりに決まっておりました。虚子とホトトギスが俳句の主流であることは、十分承知しておりましたが、何とかこれを改革しようと思いい立ちまして、もう一人選者を増やすことにしました。まず思い浮かぶのは、日野草城と山口誓子です。草城は昭和十一年に虚子によってホトトギスから除籍され、誓子も昭和十年にホトトギスから離れています。つまり二人は、虚子とは傾向が違い、新しいということだと考えました。

日野草城は昭和九年四月号の「俳句研究」に、有名な「ミヤコホテル十句」を發表しています。

けふよりの妻と泊るや宵の春

春の宵なほをとめなる妻と居り

枕辺の春の灯は妻が消しぬ

をみなとはかかるものかも春の闇

薔薇匂ふはじめての夜のしらみつつ

妻の額に春の曙はやかき

うらかな朝の焼麴麴（トースト）はづかしく

湯上がりの素顔したしも春の昼

永き日や相触れし手は触れしまま

うしなひしものをおもへり花ぐもり

この新しさは、俳句界のみでなく、広く世間をあっと言わせました。彼の結婚は昭和六年ですから、じつと温めていたのでしょうか。草城自身は出勤のバスの中で浮かんだと語っていましたが、全く従来の俳句には見られない新鮮さです。官能派とか官能主義とかの批評を浴びましたが、彼自身はむしろ新興俳句とも考えていたようです。

見て居れば心たのしき炭火かな

青簾片はづれして暮情かな

病身の草城は静かに療養しながら、戦後の昭和二十四年から既に「青玄」という俳誌を主宰していましたから、昭和二十九年の夏のはじめ、私は病気で静養中の草城さんを、池田の日光草舎に訪ねました。ねんごろにお見舞いをのべた後で、恐るおそる、「朝日俳壇はこれまで虚子先生お一人に任せておりますのを改めまして、先生にも選者に加わって頂くわけには参りませんでしょうか。もちろんご健康のことを承知しておりますので、ご無理には申しませんが、」と付け加えました。

清潔な真っ白い布団のうえに仰臥したまま沈黙しておられた草城さんは、しばらくして晏子夫人の方に、ちよつとほほ笑まれたようにみえましたが、やがて、「やってみましょうか」と、はつきり言われました。

私は大喜びで、早速東京の学芸部を通して、虚子先生に連絡しましたところ、「少し考えるから、待つように」との葉書がきました。しかし、既に草城さんの承諾を得ており、社内の手続きもすんでいましたので、重ねて虚子先生に、どうぞよろしくご了承がいますとの丁寧な手紙を出して、社告しました。しばらくして「諒承」との簡単な葉書が到着。ひと安心しましたが。

効果はてきめんです。それまでは毎週七、八十枚だった投句の葉書がたちまち三倍近くに増えました。朝日は俳句では保守的と思うていたが、この改革は大賛成との投書もありました。

さて、翌年の五月、突然虚子先生が、娘の星野立子さんと一緒に大阪本社を訪ねてきました。朝日の社主の上野精一さん（彼も三高の大先輩）は、青逸の雅号で「朝刊を待つ草屋や明けやすき」、「大霜や小石の一つ一つにも」などの俳句をつくり、ホトトギスにも載って、虚子とは親しかったので、一緒にお昼をたべましたが、立子さんが、「大阪寿司のおいしいのを少し用意して下さいませんか」との話で、帰りの列車の中でも召し上がるのかと思ひ、寿司万の上等のを取り寄せました。やがて帰られるので、朝日の車でお送りしました。

そして年が明けて、三十一年の一月に草城さんが亡くなりました。私は急いで服を改め、池田のお宅に急ぎましたが、その車の運転手が、「去年の春、俳句の偉い先生をお送りしたところですよ」といいます。よく聞きますと、二人は、草城さんを見舞ってからホテルに帰る車中で、「見舞ってよかったね、仲直りできてー」と、繰り返し話していたといふのです。

私は本当にびつくりしました。あの時ひと言、どちらへと尋ねて、助手席に乗り込んでいたら、虚子と草城の二十年ぶりの歴史的な和解の現場に立ち会うことができたのです。もちろん特種カメラマンも呼んで、社会面のトップです。おまけにお見舞いのおすしまで渡したのですから、何とも無念残念。「しもたあ、しもたあ」と、本当に大きな魚を逃がした思いで、お悔やみどころではありませんでした。今でも、寿司万のお鮓は少しスッパイ思いがいたしますが。

草城さんの後任は、もちろん山口誓子さんと思いましたが、彼はその時、毎日新聞の俳句の選者を勤めていましたから、いくらなんでも、直接引き抜くわけにはいきません。誓子さんは前にも申しましたように、三高から東大に進み、住友合資に入社、若いころから頭角を現わして、水原秋桜子、高野素十、阿波野青畝とともに、虚子門下の4Sと称されたほどでしたが、その傾向の「新しさ」が虚子の氣にいらず、昭和十年ホトトギスを去りました。そして病をえて、戦争末期には三重県の海岸で療養生活を送り、そのころ、

海に出て 木枯帰るところなし

という有名な句などを作っていました。彼はまた都会的なセンスにも優れていました。

メーデーの朱旗奪られじと荒るるものを（昭和八年）

夏の河赤き鉄鎖のはし浸る（昭和十二年）

誓子は、戦後は全く鳴りを静めておりましたところ、皆さんご存じの、桑原武夫さんの「俳句

第二芸術論」が出て、それに刺激されたのでしょうか、それなら作品で勝負、というように、西東三鬼、橋本多佳子、平畑静塔、波止影夫、榎本冬一郎らに勧められて、昭和二十三年に「天狼」を創刊していました。

私は、昭和三十一年の春のはじめ、ひそかに西宮苦樂園のお宅に誓子さんを訪ねて、朝日俳壇の選者にと頼みました。誓子さんは、即答しました。「よろしい。やりましょう。草城さんのあとですから。ただし直ぐという訳にはまいりません。半年待つて下さい。」

もうお亡くなりになりましたから、よろしいでしょうが、「密約」です。まもなく、健康上の理由で毎日俳壇の選者を辞退され、半年後にその秋から、朝日に来ていただきました。

ある時、野球の話がでしたが、誓子さんは、僕はプロ野球のテレビは見ない。ラグビーの中心は好きだ、との話。幼いころを樺太で過ごしたのち京都に戻り、京都一中ではラグビーの選手だったそうで、三高ではクラス対抗戦には出たそうです。

ラグビーのジャケツちぎれて闘へる

ラグビーの巨軀いまもなほ息はずむ

外人の声ラグビーを励ましつ

後の二句は花園球技場で、朝日が呼んだ英国の大学選手と日本代表の試合を見た折りの作です。三高寮歌集の大正十年の応援歌が誓子さんの作です。

闇黒搏つ翼東海に

揺ぎ初めては西の方

都の霞乱さんと

破壊の痛創を癒さんと

雲渦巻きて迫り来る

黙せ風の驕慢よ

作詞山口新比古とあるのは、彼の本名です。

探しましたが、草城さんの寮歌は見当たりません。ずっと続いた三高の嶽水会雑誌には、きつと二人の俳句が載っているかと思いますが、これも調べておりません。

またある日、誓子さんに「先生も草城さんも三高ですが、虚子先生はどこか違いますね」と言いましたら、「勝村さん、虚子先生も三高ですよ。碧梧桐さんも三高です」といわれてびっくりしました。長い間、虚子さんとはお付き合いしていましたが、全く迂闊な話です。早速家に帰って、三高同窓会の名簿を調べましたら、確かに載っています。ただし二人とも卒業はしていません。

高浜 清は、明治二十五年に松山の伊予中学から三高に入学、一年遅れて中学で同級の河東兼五郎（へいごろう）も三高に入り、二人は同じ家に下宿して、そこを「虚桐庵」、「双松庵」とも

称していたそうです。ところが、明治二十七年の学制改革のときに、二人とも仙台の二高にうつされました。しかし、三高の自由な空気と違って、規則づくめの校風を嫌い、揃って退学、正岡子規を慕って東京に出たという話です。

お断りしたいのは、今日の話のなかで、いろいろの方に、先生といたり、さんと呼んだり、また全く呼び捨てにしたりも致しましたが、これも日頃の口癖がでしたので、どうぞご勘弁願います。

最後に、今日の話のなかに、俳号、雅号だけを申し上げて、本名や年齢などを言わなかった人がたくさんありますが、これも、昔のメモや、切り抜きも、ほとんど残っておりませんので、ご了解をお願い致します。

新聞記者も昔は雅号をつけた人もたくさんおまして、戦前、朝日の天声人語の筆者として有名だった釈瓢斎も、本名は永井栄蔵、明治四十一年三高一部法科の出身で、有名な寮歌「賄征伐の歌」の作者です。

今日お話した主な俳人の雅号と本名だけを並べますと、

高浜虚子 清(きよし)

河東碧梧桐 乗五郎(へいごろう)

鈴鹿野風呂 登(のぼる)

山口誓子 新比古(ちかひこ)

西東三鬼 斎藤敬直(さいとう・けいちよく)

ちよつと見ましても、どうやらシヤレに近いものもあるようですが、明治の文豪、森鷗外が面白いことを言うております。どこで読んだのかは思い出せませんが、江戸時代の俳人の、「其蜩」(きちょう)という俳号を、面白いと褒めております。実は、「その ひぐらし」と読める寓意が、気がきいているというわけです。

今日の話の最初に、新聞記者は、その日暮しだと申しあげましたが、どうやらオチのようなのがつきましたところで、終らせていただきたいと思います。

まことに、まとまらない話で、失礼いたしました。

【補遺】

☆☆……平畑静塔は僕の同級生ですが、大陸に召集されてから、どうなったでしょうか。

★★敗戦後、無事に帰還したようです。戦後の山口誓子の「天狼」創刊にも参加していますし、その後も、句集を出しています。

☆☆……滝川事件のころに、朝日の京都版に、「カクテル」という投書欄があり、大学教授

なども投書して、面白く読みましたが。

★★あの投書欄には、町のお菓子屋さんや、現職の検事さんも登場したりしましたし、滝川事件後に法学部教授を、残留組と玉砕組と名付けたり、宮本英脩教授が自ら「中軟派の立場」と名乗って弁明したり、流行歌の替え歌がでたりして、賑やかでした。また投書家の会合「カクテール会」を開いたりもしましたが、時局が悪化して、敵性語がいかんとなって、改名を迫られました。いろいろの案のなかで「残置燈」というのが有力候補でしたが、結局「大文字」と改名しました。残置燈というのは、覚えておられる方もあるでしょうが、空襲警報下でも保安のために、ただ一つ町角に残したポツリと光る電灯のことで、私は「象徴的でいいじゃないか」と主張したのですが、「そりゃ、あぶない」と見送られました。しかし、太平洋戦争開戦のころには、この「大文字」も消えました。投書載せて、批判するような余裕は、もうありませんでした。

(朝日新聞社友)

【参考にした文献】

大岡 信 子規・虚子 評論集

(花神社刊)

三好達治 俳句鑑賞

(筑摩書房)

現代俳句の世界・西東三鬼集

(朝日文庫)

西東三鬼・冬の桃

(毎日新聞社)

現代俳句文学全集・日野草城集

(角川書店版)

日野草城句集

(新潮文庫)

現代俳句叢書 日野草城句集・春

(白井書房)

現代の俳句・山口誓子句集

(白鳳社)

現代の俳句・平畑静塔句集

(白鳳社)

朝日新聞・大阪

(朝日新聞社)